

「2025年度香港中文大学サマープログラム派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 高宮 諒

①学習成果

今回のサマープログラムは、当初から強い意志をもって参加を決めたわけではない。締切直前になんとなく「行ってみよう」と思い立ったことがきっかけであった。しかし、今はあの時の選択を本当に良かったと思っている。それは、結果的にその選択は私の学習や進路観に大きな変化をもたらしたからだ。最も大きな成果は、「文化は自分の目で見て体感して初めて理解できる」という実感を得られたことである。参加前、私にとって香港は「中国の一部」という漠然としたイメージでしかなかった。だが、実際の香港は東洋と西洋が交錯する独自の文化をもつ大都市であり、その姿を肌で感じたことは、国際理解への意欲を大きく高めてくれた。また、語学面でも毎日の中国語講義を通じて、自分の力が短期間で着実に伸びていく手応えを得た。同時に、交流や授業において英語の重要性を痛感し、今後の学習意欲を一層強める契機となった。

②海外経験

香港滞在で強く印象に残っているのは、都市の活気と人々の熱気である。初めて夜景を目にした時の息をのむ美しさや、山と高層ビルがせめぎ合うダイナミックな都市景観は、強烈な印象を残した。さらに、現地の学生との交流は、教科書では得られない貴重な体験となった。彼らは私を地元ならではの場所に案内し、時には香港の政治や社会について語ってくれた。ある学生は、中国本土の影響により、これまでの「香港らしさ」が失われつつある現状を話してくれ、自らの「香港アイデンティティー」を話ってくれた。その言葉は、日本の外に立つことで初めて「日本人とは何か」を考える契機となった。海外に身を置くことで、自分自身や自国を相対化できるということを深く実感した経験であった。彼らとの交流は、私の視野を日本だけで生きていたときの狭いものから、グローバルなものに広げてくれたと思う。

③プログラム内容

プログラムの中心は平日に毎日行われる中国語講義であった。日本での隔週の授業と比べ、ネイティブの先生から集中的に指導を受けられる環境は、中国語力を高めるうえで極めて効果的だった。また、授業や交流では英語が主に用いられたため、自分の英語力不足を痛感した。海外での学びには英語が共通言語として欠かせないことを実感し、語学学習全般への意識が大きく変わった。さらに、休日の深圳旅行や文化活動を通じて、香港と中国本土の違いを直接比較できたことも大きな収穫である。プログラム全体を通じて、単なる観光では得られない学びと気づきを数多く得ることができた。

④進路への影響

この経験を通じて、私は将来、より長期の留学に挑戦したいと思うようになった。それは、三週間という短期間では文化や社会の奥深さを十分に理解するには限界があり、より長い時間をかけて異文化に身を置きたいと考えるようになったからである。また、私は今後、文学部で日本史を学ぼうと考えているが、日本を理解するには海外の視点をもつことが不可欠であると感じるようになった。国外に身を置くことで、日本に暮らすだけでは見えてこない日本の姿や自分自身の位置づけが浮かび上がる。これまで私は、日本の歴史を学ぶならば日本で学ぶべきで、自分の場合、留学はただ人生経験として行くものだと思っていた。しかし今は、留学は単なる「人生経験」ととどまらず、学問と自己を深めるための重要な機会であると確信している。今回のプログラムは偶然のきっかけから始まったが、私の学習意欲と国際理解への関心を大きく高め、進路選択にも確かな方向性を与えてくれた。